

古本市をめぐる人々

—1920年代のモスクワ—

横田 運代

はじめに

- 1 ネップ時代のキタイゴロド
- 2 愛書家たちの群れ

- 3 文化人たちとの交流
- 4 よき時代の終わり

はじめに

今日ソ連は、劇的な変革の時代を迎えて、世界の注目を集めている。その動きは目まぐるしく、情勢は刻々と変化し、誰もその行方を、正確に予測することはできない。これまで絶対視されてきた一つの価値観を、根本からくつがえすという大胆な試みがなされたのは、これが初めてではない。約70年前、革命後の混乱と無秩序の中から生まれた、期待と不安の交錯する独得の雰囲気も、まさに変革期のそれであった。革命直後の戦時共産主義が一段落したあと、経済的にも、文化的にも、さまざまな試みがなされ、新しい時代にふさわしい文学や芸術を生み出そうという意識が高まった。スターリンによる独裁が始まるまでの短い期間であったが、比較的寛容な文化政策が採られ、人々は、自由で活気に満ちた時代を迎えていた。

ここに紹介する、レフ・アブラーモヴィチ・グレゼル(Лев Абрамович Глезер)が、モスクワのキタイゴロド(Китайгород—モスクワ最古の商工業地区で赤の広場を含むクレムリン東方地域、現在は政府

官庁所在地)で古本屋を営んでいたのは、まさにその1920年代にあたる。彼は、ソ連で最も古い古本屋のひとりで、1924年に書籍行商人としてキタイゴロドの市で仕事を始め、以来60年間、本とともにその人生を歩んできた。彼の手記“Записки букиниста”。(Москва：“Книга”，1989)を通して、今では思い起こす人も少ない、当時のキタイゴロドの古本市の様子を知ることができる。

1. ネップ時代のキタイゴロド

16世紀前半に築かれたキタイゴロドの壁は、かつての商工地帯を取り囲み、モスクワの他の地区とは区別されていた。古本市が始まったこの壁の外側は、愛書家にとって格好の隠れ家となる。この場所が選ばれたのは、偶然ではない。当時キタイゴロドには、人民委員部を始め、小さな事務所や倉庫、民営の合同企業や株式会社などがひしめいていた。毎日、市電から人々の巨大な流れがルビヤンカ広場にあふれ出し、キタイゴロドへと向かう。ルビヤンカ広場は、モスクワでも最も活気のある場所の一つであった。モスクワの37の市電ルートのうち、18がここ

に通じていた。壁の内側には党中央委員会があり、その斜め向かいには国民経済最高会議が陣取り、国中から人々が派遣されてきた。このようにキタイゴロド全体が、モスクワのビジネスセンターだったのである。

1920年代には、すべてが今日とは異なっていた。広場はずっと小さく、真中には彫刻群と噴水があり、広場の真向かいにある、19世紀後半に建てられた博物館との間には、モスクワ市立ユダヤ人図書館と、御者たちの間で人気のあった居酒屋があった。入口には常時10台以上の幌馬車が並んでおり、愛書家たちも好んでここを利用していた。古本屋の仕事は、夜明けとともに始まり、暗くなるまで続くのだが、ここで一杯のお茶と、ソーセージつきのオムレツにありつくことができたのである。

古本屋の仕事は、けっして容易ではなかった。雨、雪など、あらゆる悪天候が障りとなった。少しでも仕事を楽にするために、血縁のある者同士が、二人ずつ組になった。グレゼルの場合も、兄弟で仕事をしていた。幾つもの場所で保管されていた本が、束になって荷馬車で運ばれ、筥や袋の上に並べられ、商売が始まる。自分の所属する書籍販売機関に出かけてゆき、前日の売上金を渡し、新しい商品を選んで、キタイゴロドの仕事場に届ける。彼らは書籍行商人と呼ばれたが、当時の書籍行商人は、本を配達していたわけではない。彼らは書籍販売機関の定員外であって、賃金は正職員よりも低く、労働組合のメンバーにもなれなかった。民営の本屋と違って、決められた場所で書籍を販売し、非課税であった。書籍販売機関の幹部によって、文献を金に換え

る計画が定められると、行商人にも一定の歩合が支払われたが、賃金は平均的な勤め人よりはるかに少なく、収入を得るため兼業が許されていた。

グレゼルは、主に新モスクワ出版所で仕事をし、兼務として、国立図書出版所のレニングラード支部で働いた。1922年、モスクワに国立図書出版所の販売部局が創設され、国有化された文献の在庫を短期間で分類し、商品としての体裁を整えることになった。この膨大な仕事を実行したのは、書籍愛好家の小さなグループであった。文献の在庫は、国立図書出版所の販売部局だけでなく、新モスクワ出版所、ソ連邦消費組合中央連合など、他のモスクワの書籍販売機関にも引き渡された。この巨大な本の山を、できるだけ早く消費者に届けなくてはならなかった。内戦が終わると、国民生活は改善され、人々の文化に対する要求は高まっていた。ソ連の本はまだ発行部数が少なく、革命前の古い出版物も売られていた。したがって、商品は豊富にあり、古本屋の仕事は増え続けていた。

時とともに、民営の商人（いわゆるネップ）の中には、売店を建てる者もいた。もう本をどこかへ運ぶ必要はなく、本の陳列には3枚の壁が利用され、夜にはシャッターが降ろされた。そして頭上に屋根ができたため、本の損傷が減った。国営の機関も、個人経営者の例に従い、組織は改善され、古本屋たちは経験を積み、知識を増やし、仕事を広げていった。愛書家たちの好みはさまざまで、R・キップリング、R・ステイーヴンソン、C・ディケンズ、C・ドイル、H・イプセン、S・ラーゲルレーヴ、P・ロチ、O・ワイルド、M・メーテルリンクらの著作集の端本が

求められた。本の山はどんどんくずれていったが、翌日には、また別の本で一杯になった。活動的な愛書家たちは、一週間で完全な著作集を収集していたが、そのためには、街中に散在している古本屋を訪ねなければならなかった。歴史、自然科学、哲学、医学など、本の品数は多く、しだいに新しい本が現われるようになった。新たに印刷された本を保管するために、1917年改正以前の古い正字法で書かれた在庫は、安値で売られていった。

この頃になると、営業鑑札を持ち、所得税を払う個人の書籍商人が出現する一方、読書欲とともに個人の蔵書収集熱が高まり、キタイゴロドの壁でも、セット物の美術書や百科事典、図鑑などの高価な本が売られるようになっていった。もとより古本市を構成していたのは、種々雑多な本や、小冊子や、雑誌の端本である。この中から、愛好者たちは稀覯本を掘り出すことに夢中になった。買手の注意を引くために、大声を張り上げて本を売る者もあった。彼らが声高に宣伝していたのは、『夫の不在中、妻は何をするか』とか、『マリヤ林の謎の殺人』といったつまらぬ本であったが、売れ行きはなかなかのものだった。

1923~28年の間、多くの出版所が、外国の文学作品の翻訳物を出版する方針を採っていた。国立図書出版所だけでなく、「時代」、「ベトログラード」、A・F・マルクス出版所、「アテネ」、「サークル」、「プロレタリア」など、民営や協同組合の出版所が、色鮮やかな装丁の本を、1,000~3,000部で出版した。翻訳は現代的で、質も高く、値段は75コペイカから2ルーブリだった。出版物の大部分は、印刷組合を通じて広まり、売店で新聞や雑誌と

並んで売られていた。これらは、J・ロンドン、E・ウォレス、E・バローズ、M・ルブラン、G・チェスタトン、G・ルルーなどの作品だった。いずれも、探偵小説もしくは冒険小説のジャンルに属するもので、1920年代には、一種の流行となっていた。あるとき、キタイゴロドで、印刷組合の中央書庫に、この種の本が大量に集まったという噂が流れた。国中からここに返本されたものだが、一部は破損したり、日に焼けたりしていた。在庫一掃のために、当局は定価の9割引、すなわち10コペイカの安値で売った。2、3日で在庫は一掃され、民営の商人はごっそり買って行って、通常値段で売ったが、モスクワでは結構売れた。

古本屋の中に、誰よりも目敏く、先見の明ある人物がいた。彼は印刷組合の書庫で、E・バローズの本だけを買入れた。30年代、バローズの本に注文が殺到し、読者は非常に高い代金を支払うことも厭わなかった。彼は1年余り、自宅にバローズの本を保管しておいてから売りに出した。毎日、1部か2部ずつ持参し、1冊を4~5ルーブリで売った。バローズの『ターザン』シリーズはいろいろな出版所で発行され、幾度も再版されるほど人気があった。文学的価値は別として、この軽い娯楽作品は後年になっても、需要は多く高価であった。

キタイゴロドの一日は、未明に始まる。愛書家たちは、ベテランも初心者も、一日中ここに群がって、自身の掘り出し物を探していた。この自然発生的な市場の騒音は、かなりのものであったらしい。急いで往来する市電のうなりは、絶えず大きくなっていく。人々の集団が次々に生まれ、もぐりの商人たちが商売の場所

を探し求める。べてん師やすりが横行し、闇取引所もあって、金貨や、金細工や、ダイヤモンドの売買が行なわれていた。

2. 愛書家たちの群れ

グレゼルは、1924年から1931年までキタイゴロドで仕事をし、何千人もの人々に出会った。さまざまな職業の、さまざまな運命を背負った人々が、本との出会いを求めて行き交い、同好の仲間と語り合い、そこに一つの文化が生まれた。著名な作家、芸術家、大学教授、俳優らも、本を愛するがゆえに集まってきた。グレゼルはその手記の中で、本と人々の織りなすさまざまなドラマを、なつかしさと愛情をこめて、生き生きと語っている。

古本屋たちの友人で、有名な歯科医がいた。自宅に診療室があり、患者を診ていたが、古本屋が来ると順番を待たずに受けつけたばかりか、治療費も取らなかった。彼は背が高く、キタイゴロドにやってくるとすぐ目につき、いつも手さげかばんと大きな手帳を携えていた。教師であり、社会活動家でもあった亡き妻を偲んで、小さな田舎町に図書館を設立し、蔵書のための支出もすべて自分でまかっていた。彼はロシアと外国の作家の著作集を集めていて、入手したものはすべて手帳に記入し、本がたくさん集まると、自分の図書館に送っていた。

また、絶えず古本市に現われる、モスクワ大学の2人の数学教授がいた。2人とも尊敬されてはいたが、いわゆる奇人であった。ひとは本を買うとき、いつも気づかれぬように、書類かばんに本を1、2冊、隠して持って行った。彼には盗癖があったのだ。売る方は盗みに気づいても、見て見ぬふりをした。1、2日

後、夫人がやって来て、夫がどこから本を「借りた」のかをつきとめ、支払った。もうひとは、しばしば酒乱となり、しかもそれが長引くのであった。症状が重い日には、本を売りにやって来る。古本屋は彼の本を買っても、わきへよけておき、病気が回復するまで保管した。そのうちに、再び同じ値段で、彼のもとへ戻っていったのだ。

蔵書を集める人々の多くは、キタイゴロドでその補充を行なった。彼らの名前は、今日では知られていないが、我を忘れて本に熱中し、自分の蔵書を集めることに、多くの時間とエネルギーを費した人々だった。それぞれが独自のテーマに取りつかれた、マニアたちであった。

教師P・シャイキンは、貧弱な、背の低い静かな人物で、いつも忍び寄るように、人知れずやって来た。初めは冒険物語のみだったが、やがて、ロシアの古典文学を買い始めた。自分の給料をすべて本に費した彼は、晩年には「雑食」となり、興味を引かれれば何でも買っていった。が、珍本で彼を驚かせることは、年々難しくなっていた。彼は死の直前にも古本屋に立ち寄り、何か面白いものはないかと尋ねていた。彼の蔵書は、まことに堂々たるものだった。彼が死ぬと、未亡人は学者と称する連中に、こっそり本を売り始めた。E・ガボリオ、E・シュー、F・ボアゴベらの著作を、無知と経験のなきゆえに、古本屋に相談もせず、二束三文で売り払ってしまったのだ。これらの作家の作品は、19世紀後半から20世紀初めにかけて出版された探偵物や冒険物で、多くの読者を引きつけていた。そのうえ、発行部数が少ないため、ぼろぼろになるまで読まれた。公共図書館では全く保存

されなかったため、珍本となり高値がついた。そして今日でも、愛書家たちの関心を引き続けている。このように、シャイキンの蔵書は規模が大きく、計画的に集められたもので、他に類を見ない。

1920年代に人気の高かった、舞台俳優のG・アフォーニン(1894~1959)は、同業者のN・スミルノフ=ソコリスキイ(1898~1962)と舞台の上で張り合っていたが、書籍収集家としての彼にも無関心でいられず、自らも蔵書を集め始めた。彼は、プーシキン派の文芸作品集や、優美で粋な装丁の、ロシアや外国の作家の著作集を集めていた。美しい豪華な本を愛し、特に劇場に関する珍しい本を自慢していたが、結局、スミルノフ=ソコリスキイの蔵書には及ばなかった。大戦後、職を得られず、彼は多くの本を売ることをよぎなくされた。その死後、蔵書の大部分は、未亡人の手で全ロシア演劇協会に売られた。

20年代の終わりから30年代の初めにかけて、モスクワの本屋にひとりの興味深い人物が出没していた。彼、ジャーナリストのギンズブルクは、プーシキン派の選集、木版画入りの出版物、19世紀前半の珍本を集めていた。資金不足の彼は、高価な稀覯本を買うための工夫をしていた。はき古しの靴をはき、靴下には穴があいていて、ズボンのすそはほころび、全体がどことなくだらしない感じがした。彼は、稼いだ金をすべて本に費した。本に対する彼の嗅覚は驚くべきもので、珍本の出現を見事に察知した。保存のすぐれたものしか買わず、多くの愛書家にとって権威であり、彼らが「ギンズブルクはこれを見たのに、なぜ買わなかったのか」と尋ねるほどだった。本の趣味は

デリケートで、グレゼルもギンズブルクから、骨董的な書物について多くのことを教えられた。30年代にはいってしばらくすると、モスクワで彼を見かけることはなくなった。後にわかったことだが、彼は早くに亡くなり、その蔵書は散り散りになってしまったということだ。

作家N・ボグダーノフの夫人、V・ボグダーノヴァも、熱心な収集家であった。彼女はとても美人で、愛書家の間でも人気者だった。アカデミア出版所の本の収集に始まり、知識を深めつつ、18~19世紀の文芸作品集や、聖書や、さし絵入り出版物などを入手していった。彼女は、ギンズブルクやスミルノフ=ソコリスキイの競争者でもあったが、古本屋は進んで、彼女のために本を取っておいた。その死後、蔵書の一部が売られたとき、かなりの高値がついた。稀覯本を求め人々が押し寄せたが、買い手が多過ぎて收拾がつかなくなってしまった。グレゼルも何冊か入手したが、18~19世紀の出版物を中心に、珍しく価値の高いものが数百冊もあったという。目撃者によれば、その蔵書の眺めは、まことに色鮮やかだったということだ。

もうひとり、グレゼルが当時本を売り、その10年後再び本を買い取った、書籍収集家がいる。V・グリンスキイという音楽家だ。当時人気のあるオーケストラでフルートを演奏していたが、1926~27年に本を買い始めた。さし絵入りの本が中心で、ソ連の画家のさし絵入りの本はすべて集めた。興味はしだいに広がり、木版画、石版画、銅版画入りの19世紀の本を入手した。彼は、古本屋にはあまり好かれなかった。本の選び方がとても厳しく、ほんの小さなしみも、裂目も、書き込み

も、ごく目立たない損傷すらも、不合格の理由とされた。すべての本に自分の蔵書票を貼り、保存状態は驚くべきものだった。しかし時が過ぎ、大戦後、何らかの理由でそれを売らなければならなくなったのだが、古本屋たちは、ますます彼を嫌いになった。彼は一度に1、2冊ずつしか売らず、非常に高い値段をふっかけ、幾つかの店を回らないうちは売ろうとしないので、彼から本を買うことはとても困難だったからである。1950年代には姿を消してしまい、手の込んだ蔵書票のついた本は分散し、新しい所有者の手に渡った。彼もまた、我を忘れて本に夢中になったひとりだった。彼が本を手にとって、引っくり返し、丹念に検分する様子が目に浮かぶようである。グレゼルもグリンスキイの「美食家」ぶりには、舌を巻いたようだ。

B・マカーロフも古本屋の間でよく知られていた。静かで、店にはいつて来ても何も尋ねない。しかし、彼の目的が雑誌であることは、誰もが知っていた。長い年月をかけて選び出し、一年分のセットを買うことを望んでいたが、端本も入手していた。彼は、付録付きの雑誌や、その後出版されることのない文学作品や論文の載った雑誌や、『歴史通報』“Исторический вестник”、『ロシアの往時』“Русская старина”、『同時代人』“Современник”、『徒刑と追放』“Каторга и ссылка”、『印刷と革命』“Печать и революция”、『外国文学通報』“Вестник иностранной литературы”など、作家や歴史家にとっても興味ある資料の載った雑誌を買った。雑誌の収集は、困難で手間のかかる仕事である。読み終わると捨てられてしまう場合が多いし、需要もあまり

大きくなかったため、古本屋も取扱うことをあまり好まないからだ。マカーロフはいつも手帳を持ち歩き、欠号をメモしていた。

3. 文化人たちとの交流

当時、キタイゴロドの古本市に足繁く通い、すぐれた蔵書を収集した人々は大勢いる。医学アカデミーの会員で、医学史家のV・テルノフスキイ、作曲家でアカデミー会員のB・アサーフィエフ(1884~1949)、舞台俳優のV・ヘンキン(1883~1953)、ジャーナリストのV・ギリャロフスキイ(1853~1935)、作家のL・レオーノフ(1899~), Vs・イヴァーノフ(1895~1963)、ロシア文学教授のI・ロザノフ(1874~1959)らであった。

一日の仕事を終えると、グレゼルは、ベテランの古本屋、M・シシュコフの店を好んで訪ねた。店はゲルツェン通りの22番地の半地下室にあり、夕方になると、そこは一風変わったクラブになった。ここには、作家のV・リジン(1894~), イヴァーノフ、チェスのモスクワチャンピオン、N・グリゴリーエフ、チェッカーのソ連チャンピオン、V・メトコフ、そしてギリャロフスキイらがやって来た。古本屋たちもふらっと訪ねて来て、さまざまなテーマの会話がはずんだ。店にはたくさん本があり、棚を埋めつくしていただけでなく、床から天井まで山積みになり、外へはみ出していた。が、本を管理するシステムは何もない。夕方、友人たちが集まると閉店になるが、遅れてやって来る客が、断わられることはなかった。シシュコフの記憶力はすぐれていたが、これは多くの古本屋に共通している。彼は、客に質問されても考え込んだりせず、

本の山の一つに近寄り、必要な本を引っ張り出すことができた。小柄で少し猫背の彼は、高等教育を受けていなかったが、独得のセンスを持っていて、触れただけで、その本のことがわかるのであった。多くのモスクワっ子が、彼の助けを借りて蔵書を収集し、誰かのために取っておいた本が役に立つと、いつも子供のように喜んでいて。ネップの終了後、30年代の初め、彼はゴーリキを通りの「作家の店」(Лавка писателей)で仕事をするようになる。店の2階は、もっぱら作家たちに提供されていた。この静かな場所で、彼らは本を調べ、本の販売も行なわれた。最も尊重されたのは、18~19世紀の骨董的なさし絵入りの本だった。「作家の店」には、イヴァーノフ、レオーノフ、リジン、詩人のデミヤン・ベードヌイ(1883~1945)、スミルノフ=ソコリスキイ、アカデミー会員のV・ヴィノグラードフ(1895~1969)らのほか、モスクワ芸術座の愛書家たちもやって来た。

一方、年老いた古本屋のV・ヴォルヌーヒンは、古本市の常連であだ名はクープ、朝からやって来るのだが、酒好きで、いつも金がなかった。老いた仲間への哀れみの気持から彼を助ける者もいて、チェーホフ全集23巻を、1ルーブリで売ってやったりもした。夕方近くにほろ酔い気分で借金をし、礼を言ってから、たった一つの楽しみであるチェッカーをしに出かけてゆく。朝になると再び姿を現わし、助けを求めるのだが、借金を返したためしはない。彼がクープと呼ばれていたのは、以前小料理屋で働いていたとき、湯沸し器(クープ)の番をするのが仕事だったからである。本名よりもクープという名で知られていた彼は、善良で、素

朴で、あだ名に対して腹も立てず、常客に対しては、尊敬と愛情をこめて、名前に父称をつけて呼んでいた。

グレゼルが深い尊敬と感謝の念とともに、思い起こす常客がいた。彼は、背が低く、白い口ひげをはやし、手に杖を持ち、ほとんどささやくような声で話し、目立たないが感じのよい老紳士であった。足繁くキタイゴロドに通い、若い買い手と語り合い、何を読んでいるのかを尋ね、さらに何を読むべきかを勧め、助言をしていた。ときおり、昼食や両替などの際、グレゼルのかわりに店に残って、本を売ったりもした。知らず知らずのうちに、本についていろいろ教えてくれていたこの人が、有名な技師で、アカデミー会員で労働英雄であり、モスクワ・ソヴィエトの代議員でもあったV・シューポフであることをグレゼルが知ったのは、ずっとあとのことだった。彼は1939年に交通事故で亡くなるが、1963年に、モスクワの通りに彼の名がつけられた。

4. よき時代の終わり

ネップの時代が終わると、すべての古本屋と書店の所有者は、国家または協同組合の本屋で働くことになる。1934年、政府の決定により、すべての個人および協同組合の出版社は廃止された。書店の数は絶えず増加していったが、グレゼルの心を占めていたのは、彼にとって人生の学校とも言うべき、キタイゴロドの古本市であった。20年代には、毎年5月5日の印刷の日に、古本市が大々的に催されていた。たいていトヴェルスコイ大通りで行なわれ、7~10日間続き、すべての出版社や書店が参加した。軍の吹奏楽団が演奏し、至る所に赤い布地に書かれ

たスローガンが飾られ、売店では、作家や詩人や文化人が、本やポスターや雑誌を売るのを手伝った。しばしば自分の著作を売り、サインもした。本の販売に携わる者だけでなく、本を愛する人々のための、お祭りだったのだ。V・マヤコフスキイ(1893~1930)を初め、I・ウトキン(1903~1944)、A・ジャーロフ(1904~)、A・ベズィメンスキイ(1898~1973)ら、著名な詩人や作家が本を売っていた。今日では、古本市は、街の中心から離れた場所で、小規模に行なわれるだけで、当時のような熱狂的な催し物ではなくなってしまった。「キタイゴロドの壁よ! どれほどの人々が、本の列のそばを通り過ぎていったことか。」と叫ぶグレゼルの心には、過ぎし日の古本市の面影が、焼きついて離れないのだ。

だが、このよき時代は、スターリン時代の到来の前に、あわただしく終わろうとしていた。詩人マヤコフスキイの死は、それを象徴する事件であったとも言える。ときおりキタイゴロドの売店のそばを、ゆったりとした男らしい足取りで歩いていく彼の姿を見かけると、古本屋たちは、「マヤコフスキイだ、マヤコフスキイだ」と、ささやき合ったものだった。彼はたいてい、幾分心配そうな様子で、しばしば詩人のウトキンと一緒だった。彼らは隣りの新聞社、コムソモリスカ

ヤ・プラウダに行くところだったのである。1930年4月14日、マヤコフスキイの人生は、自殺という悲劇的な幕切れを以って終わった。古本市から200メートルのルビヤンカ横町で起こったこの不幸な出来事は、すぐにキタイゴロド中に知れ渡った。4月16日の『イズヴェスチャ』には、次のような記事が載った。「モスクワ市キタイゴロドの古本屋は、哀悼の意を以って、詩人ウラジーミル・マヤコフスキイの早過ぎる死を伝えるものである」。

また、首相M・カリーニン(1875~1946)も、しばしばキタイゴロドに姿を見せた。古本屋たちは彼に会って挨拶をしようと、カリーニンはいつも笑顔でこたえていた。グレゼルは1934年、政府会館のクラブで、彼と知り合う幸運に恵まれた。そこでは、チェッカーのソ連邦選手権試合の第5回決勝が行なわれていて、カリーニンは党中央執行委員会書記のA・エヌキーゼ(1877~1937)とともに、会場に来ていたのである。グレゼルは短い時間ではあったが、彼らと言葉を交わすことができた。のちに彼らは二人とも、悲劇的な死を遂げることになる。

長く、重苦しい不幸な時代は、まだ始まったばかりであった。

(よこた・かずよ 収集部外国資料課)